

Title	祖谷の蔓橋と銅鐸
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.38- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

祖谷の蔓橋と銅鐸

小桃源の稱ある阿波山中の仙境、祖谷の名物蔓橋は年々の架代と其の材料の缺乏とに據つて、今日では全部針金橋と變つた。山中九ヶの橋の中、最大の善徳橋は祖谷川を夾む岩壁の間に高く懸り、針金ではあるが形状は往時の面影を偲ぶに充分で、これは平家落人の考案と傳ふ。又善徳の東、榎の鉾大明神境内附近よりは一ヶの銅鐸が發掘されたが、かゝる山間僻地に銅鐸尊重の民族が好んで居住したものでは無く、これ全く敗殘の民族となつて他の強勇の民族の難を避けつゝ吉野川を遡つて、この仙境に辿り着いたもので、これは壽永の頃都に榮華を夢みた平家一族が源氏に追はれて落人となつてこの地に亂を避けたと同様の經路であらう。それが又後世他の移住民族の爲に威壓せられて、遂に重寶の銅鐸を埋めて離散滅亡したもので、この冷めたい一つの遺物は其の民族の悲哀な末路を物語る唯一の資料である。

猶この發掘地の鉾大明神の神體は或は銅鉾ではあるまいか。若しそれが銅鉾又は銅劔であつたならば、其の銅鐸と共に同一青銅文化民族の遺物と見てよからうか。祖谷は今では交通も開け、同じく聖代の恩澤に浴して行旅の人をば喫驚せしめる程の風俗習慣等は今もう目に觸れない。(塵泥録より武田勝藏)